

## 涙の顔

柳に風折れなしというが、幼いころから貧弱な体つきのみならず、これといった病気もしないで来たが、とうとう診察を受ける破目になった。子供の運転する車に乗って福岡市内の病院に向かいながら、さまざまに思いが交錯した。

人は必ず老いるのであり、老いれば若い時のような具合にはいかず、どこかに悪いところが出てくるのは当然だ。人は病から癒えることはできても老いからは逃げることはできない。老いた肉体を現代の精密検査機の前に置けば、どこかに必ず悪いところ、機能しないところが出てくるはずである。

診察に必要な書類を全部記入して病院には子供の嫁が待っていた。まごまごしている私を総合受付から診察科の受付、各検査室へとテキパキと連れまわった。

この総合病院の待合室には外来患者やその家族がずらりと辛抱よく待っているのを見て、どうしてこの世にはこんなに病人が多いのだろう、私は今更のようにそう思った。いずれも先輩患者からいろいろ話を聞いたのだろうか、不安な表情をしている人が多かった。

四時間に及ぶ各種の検査結果の資料を前に主治医から七日後の入院を告げられた。なにしろ私は生まれてこの方入院というものを一度も経験していない。近親や友人知己の入院を見舞ったのは数多くあるから、病院がどんなところかぐらいは知っているつもりだが、自分がその身になるのというのでは大違いである。入院の翌朝、六時に起き、洗面所の鏡に映る臉のすこし脹れた自分のなさけない顔を眺めながら、残りみじかい人生の貴重な日々を病院のベッドで過ごすことになったことが口惜しかった。

手術前に主治医から

「家族の人を呼んで下さい」

と言われ、もしやという連想が浮かび、少々気が怯おそんだ。妻や子供たちがすぐにやって来て、心配のあまりかなり具体的な質問をしたようである。万一の場合にも決して異議は申しません。という、誓約書に捺印させられる家族の気持ちには複雑である。

手術の前日、総婦長らしい人がやって来た。

「明日、手術ですね。体の具合はどうですか。手術は先生と患者、看護婦が一体となって病気に立ち向かう戦いだとは私思っています。手術がすみましたら、笑顔で又お話しができることを願っています。フアイト！」

そう言って小さくガッツポーズをして見せた。

医師と患者、看護婦の執拗なまでの生への執着が、奇跡の恢復をもたらし、手術を成功させることもあ

ることを、私は教えられたのである。

移動寝台に乗せられ手術室に入ると、マスクに手術帽をかむった主治医ともう一人の医師、それに二人の看護婦がいた。

「木寺さん、頑張りましょう。緊張していますね。大丈夫ですよ。二時間ぐらいですみますからね」  
やがて麻酔がきいて私は夢心地になってきた。こんな辛い思いをするのは自分でよかった。妻や子供たちでなくて本当によかった、そう思うことで心が落ち着いていた。

私はこのまま目が覚めないかもしれないとも思った。棺の中に寝て花に覆われた自分の姿が頭に浮かんだ。

「木寺さん、木寺さん、すみましたよ」

主治医の先生の優しい、いたわりの言葉が心地よく耳を打った。

移送寝台で手術室を出ると

「お父さん、お父さん、すんだよ」

朦朧とした意識の中に、声が聞えた。妻や子供たちの心労を思うと自分の体の痛みなど問題ではなかった。二度目の手術後、又家族が呼ばれた。手術後の検査資料を前に主治医の先生の詳しい説明があった。手術の成功を喜ぶ医師の言葉もあった。妻が立ち上がって

「先生、この度は主人を助けていただき、ほんとうにありがとうございます」そう言って深く頭を下げた。

自分の体のことは自分が一番わかっている、という妙な自信は吹き飛んでしまい医師が頼もしく感ぜられた。三十一歳の青年医師の顔が輝いて見えた。

私は知らなかったが、二度目の手術に際して、出血多量で死ぬ恐れもあることを告げられていた家族の安堵は大きかった。

入院生活は目に映るもの、耳に入るもの、すべてがそれまでの日常からかけ離れている。

博多の街の人情や、いろんな職業の人の暮しの明暗、夫婦や親と子、老人の孤独など病院では垣間見ることが出来る。どんな時代でも親は子を気づかわざるを得ないし、無理解な上役に対する不平など、さまざまな人生の哀歓を見ることがもある。

規則正しい毎日の生活や、ささやかな助け合い、励まし合いを通して、一種の温かい連帯感が生まれていることに私は気付いた。

手術や病気の悪化に伴う、それぞれの不安感、そんなものを隠せない日もあったが……。患者に見る人間模様はさまざまである。

元土木建築会社の社長をやっていたEさんは、かつて多くの部下を引き連れて柳橋あたりでの豪遊はかなり有名だったらしい。彼は退院の日の朝食後病室を去ると思ったが、夕食がすむまで病室にいた。入院費はすべて夕食までの計算になっているので帰宅しなかったのである。退院する彼をエレベーターまで見送ると恥ずかしそうに

「昔と違って千円の金も無駄にできない今の自分があわれですよ。生きていけば又いいこともあるだろ

う。そう思っています」

そう言って寂しく去って行った。

又病気が治ったとはいえ、体力もなく、金もなく、すぎる知己もなく帰る職場もない荒涼とした孤独な人生を歩まねばならないような人もいた。

入院中、何ともいいようのない不安に胸をしめつけられるのを感じる人は多い。わずかな言葉のやりとりや、動作にそれが現われる。

病が癒える日が来るかもしれないーそうした思いがかすかに胸をよぎり、癒えたのちのことを心に思い描き、夜半の病床に覚めている重症の人もいる。

入院していると死は年の順ではないことを思い知らされる。死は身近な存在となって、死後の世界なども話題になる。

今夜、博多の空を彩る花火大会があるというので、五階の屋上に出た。隣にいたAさんが話しかけてきた。

「私は五回目の入院ですよ。治る見込みのない自分はどうやって、死ぬまでの時間つぶしをやってるよなもんですよ。来年の花火大会はもう見ることはないと思うと、やはり哀しくなりますよ。木寺さん、手術は痛かったですか、痛いのは生きてる証拠ですよ。退院も近いでしょう。よかったですね。遠い所から通院されるのは大変でしょうが、優しい奥さんや、子供さんのためにも頑張らねばですね」

高熱による息苦しき、手術の後の眠れない夜の疾病、危険な経験をなめた後に、今なお生命が終わらず

にいるという共通感から話は続いた。

辛かった点滴が終わり、その解放感から一階の待合室へ行き冷たい飲物を味わった。ちよつと玄関を出て、外の風景を見ていたら、退院する中年の夫婦が七階の病院を見上げていたが、建物に向かって深々と頭を下げた。目にはうつすらと光るものがあつた。その理由はわからないが、命を助けてもらったという思いからきた行動ではなかつたらうか。

いまも私の心に残る、はじめて見たじんとくる光景であつた。

入院中、私と風呂場でお互いに背中を流し合つた大工の棟梁の奥さんは、毎日夕方顔を見せた。

「あんたあ、先生といま会つていろいろ話を聞いたたら、手術と言われて青うなつてビビツたつてね。男じやろうが、ビクビクしなさんなよ。わたしや、一日中バタバタやつとるとに、あんたはベッドでゆつくり寝とるとじやろうが。どりやどけんね」

そう言つて主人をベッドから下し、自分が横になつて間もなくすやすやと寝てしまった。棟梁は椅子に腰をかけ、彼女の足を静かにやさしくもんでいた。

棟梁の二回目の手術は、五時間を越す大きな手術であつた。手術室の前の廊下を奥さんは行つたり来たりしていた。彼女の眼から吹きこぼれるように涙がしたたり落ちていた。通りかかつた私の姿を見ると、蒼ざめた顔で、

「うちの父ちゃんが可哀想かあ、私が代わつてやりたかあ」

そう言つて流れ落ちる涙を拭こうともしないで、深い溜息をついた。普段の口調とはまったく別人のよう

な、情愛溢れる言葉であった。何かやさしい言葉をかけてやりたかったが声にならなかった。

その後、自宅療養となった棟梁を見送る私に

「木寺さんが住んでいる島の沈む夕陽を、母ちゃんと一緒に見に行くことを楽しみにしていたが、多分その日はもうやってこないのではないかと思えますよ」

そばにいる奥さんがそれを聞くと、憔悴した頬に涙を流しながら泣いた。棟梁はやさしく彼女の肩に手をやり

「母ちゃん、泣くな」

そうつぶやくと深い溜息をひとつ吐いて、背を向けてあるきだした。

小柄な体がゆっくりと離れて行くのを私は見送った。車に乗り込む二人の背を弱い日射しが照らした。病むものと、それを看とるものとの映画のワンシーンを見るような、胸に迫るものがあつた。





